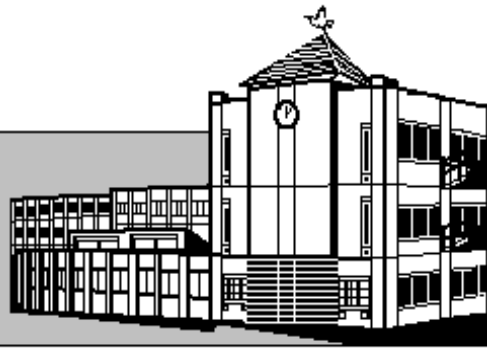


# 図書館だより



1998年7月 準備5号(緑蔭号)

編集・発行 敬和学園大学図書館

## 読書随想

### さわって、見ると

孫野 義夫

本は、読むためにだけあるのではない。戦後の経済復興の中で、一戸建ての家をもつと、その書斎とよばれる空間に、文学全集や、画集を飾り始めて、ひさしい。大学生やインテリが、着物の懐や、ブックバンドで、書物を持ち歩く風俗は、さらに古い。女性がファッションモデルのように格好良く歩こうと、頭の上に印刷物を載せて平均をとる光景も、まだ見られるかも知れない。この場合は、週刊誌や雑誌では具合が悪い。重くないと困るのである。幕末の洋書生が、とぼしい西欧の辞書を、争って引くばかりか、疲れて、枕の代用品として使ったため「枕辞書」と名の付いた字引の例もある。実験したが、鬚<sup>まげ</sup>を結っていない我々には使い勝手は良くなかった。紫式部日記に硯の箱を使ったとある。上には上がある。

古い大学で、新来の学生が驚くものに、図書館の書物の量がある。万巻の書をひもところと張り切って図書館に入るのはいいが、そのうち、はて、どのくらいの書物が読めるかと考えて、心許なく感じたのは、私だけではないであろう。菊池寛のように、大学では、ひたすら図書館の書物を読むことに専心するのも悪くない。とにかく読み始めようと決心したが、悲しいかな、横文字で読むには、外国語の知識は乏しい。漢字で書いてあっても、難しくて手こずる。そこで、毎日、意地になって通う図書館の本をさわってみようと思立った。さわって、さわって、さわり抜くのは、どうやら可能である。にんげん、いつも、その物にさわっていると、それが自分の体の一部になってくる気のである。その書物が友達に見えてきた。街の古書店でも、高価なため入手できない書籍も、この手で友達になっていった。さわっていると、ぼつぼつ読める物も出てくるのです。

ある著名な学者は、手元の初版の稀覯本は弟子にでも、遠くから見せてくれるだけで、さわらせないという話も耳にした。だれでも手に取ることの出来る開架式の図書館というのは、すばらしい構想である。ただ、私のような老書生には、分厚い本は負担である。そのためにも腕力は必要と感じる。で、文庫ばかり探している習慣は考え直さなければと思い始めている。インターネットの時代が来たというのに。

(本学教員)

## 再開に当たって

1998年4月 敬和学園大学図書館

しばらく閉館してご迷惑をかけましたが、関係の皆さんのご協力を得て準備が成り、4月1日に新装・再開の運びとなりました。スペースが広がり、座席やビデオブースの数が増えるほか、新聞・雑誌コーナーなど多くの点で利用しやすくなるはずで、新しい書架の位置など、不明な点は何なりと図書館員におたずね下さい。この機会に、一層のご利用を期待いたします。(一部を再録)

「五月病」ということばは最近あまり聞かれないようであるが、青年の悩みがなくなってしまったわけではあるまい。物質的にみたされているだけ、心が飢えているという逆説も成り立ちそうである。人生の先輩として3人の先生方にご自分の体験をもとに語っていただいた。

## 「疾風怒濤」の時期

益谷 真

所定の教育をおえて、社会の中での自分の位置や働きを探し、周囲から一人前として認められるまでの時期を青年期と呼びます。現代の日本では、およそ高校生ぐらいから三十歳ぐらいまでの時期に相当します。その青年たちが、精神的な成長のためにクリアしなくてはならない重要な課題の1つに、「自分とは何か」という問いかけに対する自分なりの答えを得ることがあげられます。

しかし、現代の青年を取りまく状況は、その答え探しに、それほど援助的でも促進的でもありません。その答えは、漫然とした生活の中からは見つけ出せません。競争にさらされたり、制約の中でやりくりをして、自分でつかみ取るといった試練がなければ、その答えは見つけ出せないのです。このような危機的な状況に出会うことから、青年期は「疾風怒濤」の時期だといわれています。今の青年をとりまく状況は「何でもあり」で選択肢は多いのですが、同時に「夢のもてない」社会でもあるともいえそうです。「何にでもなれそう」な状況で「何になるのか」を決めるのは、たいへんです。

青年期にそれなりの荒波を乗り越えてきた大人たちの目には、今の青年たちは、「打たれ弱く甘たれている」、「うわべは優しく気はよいが自信や誇りが無い」とうつりますが、今の青年たちにもそれなりの「たいへんさ」があることを、理解しなくてはならないでしょう。今の青年たちに「鉄は熱いうちに打て」と接すれば疎まれ、「若い時の苦勞は買ってでも」と求めれば「ばかをみるのは嫌」と拒否されるでしょう。「<sup>らく</sup>楽しんで楽しい」のも悪くはありません。しかしそんな青年たちも、いったん社会に出れば、

自分の気に入らない人とも付き合っていかななくてはなりません。そうなった時に、「自分は人からどう見られているのか」などと気に病んでいる場合ではなくなります。

ですから学生の中に、様々な書物などを通じて新しい知識に触れたなら、それを頭の奥深くにしまい込んでしまわずに、それを話のネタに、もっといろいろな価値観をもつ人びとと議論してみてもどうでしょうか。自分の言葉で話してみても、感心されたり、否定されたりすることを通じて、異質なものに対しても、少しずつ抵抗力がついていくのではないのでしょうか。何事も穏便な生活から、少し自己表現を試みる勇氣を持つことが、青年から成人へのステップアップに必要なのではないかと感じます。

(本学教員)

## 教職を志す君たちへ

柴沼 晶子

日本中の人々に衝撃を与えたあの神戸の中学生の凶悪事件以後、われわれいづれかの場で教育に携わる大人は現代社会の病理や教育の荒廃に直面させられて、これまでの教育の反省を迫られています。文部大臣が中央教育審議会に「心の教育」のあり方を諮問し、教育関係の雑誌をはじめ一般誌にも「心の教育」についての多くの論稿が現れています。

しかし、「心の教育」とは何かと考えるとき、私は教育という営みは本来「心の教育」を含んでいる、いや「心の教育」を含まない教育などありえないのではないかと思うのです。「心の教育」とことさら言うのは「教育」からいつの間にかこの部分を追い出してしまったからなのでしょう。つまり、知識、技能を学ばせ、身につけさせることが教育であるという考え方が暗黙の了解となってしまっているのではないでし

ようか。教職課程を担当してしばしばこのことを痛感させられる場面に遭遇します。「教育本質・目標論」で日本の近代的教育制度の出発点となった明治5年の学制施行時に出された「被仰出書」の立身出世主義的、実学主義的教育観と、同志社大学の設立趣意書に示されている新島襄のキリスト教を基盤とする主体的人格形成を目的とする教育観とを対比させた時、授業後のコメントに「なぜキリスト教が人格教育の理念をもたらしたといえるのか」という質問がありました。次の時間にキリスト教的人間把握について説明しながら、私自身教育とは人間形成であり、教育の目標論とは人間の在り方、つまり理想的人間像に向けての人間形成の営みを考究することである、ということ説得力をもって説いていなかったと反省しました。

「人間とは」というテーマは学問に共通のもので、プラトンの『国家』は政治、哲学論であるとともに教育学の古典です。英国の教育学の必読書にワーズワースとマシュー・アーノルドが挙げられるとロンドン大学の教授に伺ったことがあります。エマソンをライフ・ワークにされている教育学者もあります。哲学や文学、そして社会科学や自然科学の書物も、「教育」の在り方を問うときその考え方を深め広げてくれます。教育とは何かを考える時、人間とは何かを探究した苦悩や思索の跡が、あるいは時代を背景にしたさまざまな思想家の回答が図書館に並んでいます。読んで考え、考えて読み、心を耕すことは、自分の存在や過去や未来に無限に広がる感覚をもつことのできる至福の時ではありませんか。 (本学教員)

## ケンブリッジの学生生活

矢嶋 直規

イギリスの大学は全部合わせても百校に足りません。しかもそれは、1980年代にそのうちの約半数を占めるポリテクニクと呼ばれていた高等専門学校が大学に昇格した結果です。若者全体から見た大学進学率はまだ日本と比べて相

当低く、大学はエリート教育の場として機能しているように思われます。

私が1年間留学した英国のケンブリッジは大学街で、街全体が、世界中から集まってきた研究者、教員、そして学生の、研究と生活のための施設という様相を呈しています。学生たちは学びの場であると同時に生活の場でもあるカレッジと呼ばれる寮に所属しています。カレッジには先生たちの研究室、図書館、事務施設のほか、学生の個室、バー、ダイニングホールを始めとする生活施設があります。

カレッジの建物は、ヨーロッパの代表的な建築がそうであるように、多くは14世紀から17世紀の建築当時のものがいまだに使われています。日本で古い大学の寮というとおんぼろというイメージがありますが、英国では当時の貴族や上流階級の師弟の住居として建てられたものですから、建物は大変豪華です。個室にはベッドルーム兼スタディールームのほかに、応接間と台所までついているのには驚かされました。ダイニングホールでの食事には全員が黒いガウンを羽織って出席し、ラテン語での祈祷の後、給仕付きでスリーコースの食事とワインを楽しみます。

勉強のほうも、大変ハードではありますが教育環境は非常に恵まれています。各学部には講義も設けられていますが、それは履修が自由で、勉強の中心はスーパーヴィジョンと呼ばれる個人指導です。私が知り合った経済学専攻の学部生は8人の先生についていて、それぞれの先生と1~2週間に一度会うために、10枚から20枚のレポートを作成しなければならないといっていました。毎週100枚ものレポートを書いている計算になります。

これほど徹底したエリート教育を受けながらも、就職は大変厳しいようです。卒業成績が5段階にはっきりとランク分けされ、大学院に進学するためには上位10パーセント以内に入っていてかつ奨学生選考に合格しなければなりませんし、成績下位者にはほとんどまともな就職

先はないという話でした。

とはいえ、しばしば行われるパーティを楽しんでいる様子を見る限り、彼らにそれほど悲壮感を感じられませんでした。パーティの圧巻はメイボールという5月の卒業パーティで、夜通し続くそのパーティへの出席には正装が義務づけられ、男性はブラックタイ、女性はイヴニングドレスです。映画のアカデミー賞の授賞式を思わせるような、肌もあらわな女子学生のドレス姿を遠くから見ると本当にため息が出ました。ほとんどの学生はカップルで参加していましたから、彼らが楽しげに見えたのはそのせいだったのかもしれませんが?!

ケンブリッジの学生生活をもっと知りたい人に：  
藤原正彦『遙かなるケンブリッジ』（新潮文庫）

（本学教員）

## 夏 に す す め る 本

山田 耕太

夏は読書にあまり向かない。しかし、近頃は屋内にはクーラーが設備され、何かと忙しいとは言え、比較的自由的な時間が長く固まって取れるので、読書に恰好な季節であるとも言える。

第一に、今年の新入生歓迎公開学術講演「いかにして教養を身につけるか」に関心をもった人々に、もう一度アンコール講演のつもりで、阿部謹也『教養とは何か』と『世間とは何か』の姉妹編を読むことをお勧めしたい。新しい教養の概念ばかりではなく、日本人とは何かを示唆し、またそこから現代の日本社会と中世以前のヨーロッパ社会との共通性、ならびに現代の日本社会とヨーロッパ社会の異質性が見えてきて、比較文化の導入にもなり、個が誕生したヨーロッパ中世への関心とともに、今後の日本社会が展開する道筋も透けて見えてこよう。

第二に、グローバルな視点で、地球上に起こ

阿部謹也『教養とは何か』『世間とは何か』（講談社）  
A・トインビー『歴史の研究』（経済往来社）  
『試練に立つ文明』（社会思想社）  
ハンチントン『文明の衝突か共存か』（集英社）  
山内昌之他『文明の衝突か共存か』（東京大学出版会）  
『風土記』（岩波書店）  
パウサニアース『ギリシア案内記』（岩波書店）  
山田耕太『ダラム便り』（すぐ書房）

った諸文明・文化がどのように生まれ、どのように滅び、なぜ現代このような文明圏・文化圏が残っているのか、という疑問を持つ人には、A・トインビーの『歴史の研究』を時間をかけて読めばよいのであるが、この大著のエッセンスとそれを下敷きにして50年前の時点で現代を洞察した論考『試練に立つ文明』から、遠大なスケールで見目を養い、巨視的な視点と微視的な視点で現代史を見ることをお勧めしたい。これはハンチントンの『文明の衝突』やその後の日本側からの議論の展開と応答である山内昌之他『文明の衝突か共存か』と比較して読むと面白いであろう。なお、最近は新版が出て読みやすくなっている。

第三に、例えば茨城、島根、佐賀方面に旅行する人は、その地方にある国府跡を探して、これらの地方に残る日本最古の文献の一つである『風土記』と読み合わせて散策してみてもいいかがか。古代が想像の世界で甦ってくるばかりでなく、古代史から現代史までの時間の流れを体感することができる。海外でギリシア方面に旅行する人は、古代遺跡巡りに、2世紀に書かれたパウサニアースの『ギリシア案内記』をガイドブックにすると古代社会にタイムスリップする。最後に、イギリス方面に旅行する人は、できれば拙著『ダラム便り』を手にして、北イングランドにまで足を伸ばし、中世からバイキング時代さらにローマ時代のハドリアヌスの壁まで見てはいかがか。（本学教員）

立花隆『インターネットはグローバル・ブレイン』 講談社

昨年、敬和学園大学にも学内LANが敷設された。学内LANはインターネットに接続されているので、学内から誰でも何時でも世界各国のホームページが見られるようになった。インターネットをいろいろ閲覧した人は実感できると思うが、多彩な情報とその量の膨大さに圧倒される。ごみのような情報もたくさんあるが、全世界の人たちが大切に育てている高度に知的な情報をもった「ブレイン・ハブ」と呼ばれるべきサイトもあちこちに生まれてきている。

いろいろな人たちがボランティアで作成したホームページを互いにリンクしあって、そのサイトにアクセスすれば、そこからそれに関連する多種多様な情報に飛ぶことができるサイトを仮にブレイン・ハブと勝手に名づけたが、このような高度な情報を持ったブレイン・ハブが今後の世界全体の知的な革命の担い手になることは間違いないと思う。これは、神経細胞がたくさん集まって神経回路をつくり、それがまた多数結合されて神経回路網となっている人間の脳の構造と似ていて、しかも、地球規模で実現されていることから、立花隆はこれを「グローバル・ブレイン」と呼んでいる。「グローバル・ブレイン」は立花隆が最初に提唱したわけではないようであるが、現在のインターネットの状況を正確に表現しているように思う。

立花隆はこのような観点からいろいろなサイトを渡り歩きながら、世界各国のブレイン・ハブを紹介している。是非この本を横に置きながら、インターネット上を渡り歩いて欲しい。本を読むと簡単なようであるが、この本の通りにリンクを渡り歩くことは結構大変である。

とは言え、「-----人類は地球空間から宇宙空間に出産した」とか、「-----これは生命進化史上でも数億年に一度しか起こらないような、そう

いう大きな出来事ではないか。それほどのことをいま人類全体が体験しつつあるのではないか-----」というのはあながち言い過ぎではないように思われる。

ホームページの3分の2は英語で書かれている。コンピュータ教室では、英日辞書、日英辞書がインストールされているので、瞬間に辞書引きができる。これを利用しながら是非全世界でどのようなことが起こっているかを知ってほしい。

司馬遼太郎『竜馬がゆく』(全8巻) 文春文庫

小学校時代か中学時代か定かでないが、もの心がついたころから、江戸時代が嫌いであった。特に江戸時代を代表する徳川幕府が嫌いであった。ちょん髷姿の俳優があらわれる映画やテレビはほとんど見たことがない。もちろん忠臣蔵もまともに観たことがなかった。原因は水戸黄門である。最後に、これが見えぬかといって、紋章を見せると、シモジモはハハアといってひれ伏し、一切の思考を停止してしまい、お上の無理難題に屈してしまう、そのような思考停止が我慢ならなかったからである。江戸時代はそのように理不尽の世界であると長く信じていた。

それがそうでもないことを教えてくれたのが、司馬遼太郎である。江戸時代にも、庶民の生き生きとした生活があり、それぞれがいろいろ工夫しながら生活していた様子が司馬遼太郎の本を通じてよく分かった。考えて見れば、江戸時代は人類史上でもユニークな時代であったように思う。

司馬遼太郎が描いた世界は日本人の人生に対する暖かい思いが溢れている。司馬遼太郎の本ならばどれでもよいが、一番学生諸君に奨められるのは、『竜馬がゆく』である。竜馬は司馬遼太郎が作り上げた英雄であるような気がしないこともないが、私たち日本人が望んでいる英雄でもあると考えられる。幕末に人々がどれだけ

命を投げだして、この国を救おうとしていたかがよく分かる。文庫本であるので、ポケットに一冊入れ、バスを待つ時間、通学のわずかな時間を利用して、全8巻を読むことを勧める。

(本学教員)

福王 守

加賀乙彦 『死刑囚の記録』 中公新書

はたしてこの図書が、楽しく貴重な夏休みにふさわしいものであるかは分かりません。ただし、究極の刑罰である「死刑」の問題について未決囚の担当医の立場から書かれた点で、学生時代の私が受けた衝撃が大きかったことは事実です。

当時法学部生であった私は、法律学に興味を持ちながらもその抽象性についていけないところがありました。特に一般常識では当然に導かれるべき結論が、法というメガネをかけると異なって導かれる点にある種の憤りすら感じていました。ですから、2年次にはあえて哲学系の教養ゼミを選びました。というのも、メガネをかけずに少しでも物事の本質をとらえる訓練ができるのではと思ったからです。そしてゼミの統一テーマが「死の思索」でした。

前期の授業では哲学者の死生観について歴史を追って学び、討論を繰り返しました。もっともテーマが余りにも重たかったせいか、しばしば議論にならないこともありました。当時ゼミ長(雑用係)であった私はこれではいけないと思い、ゼミコンパ、夏合宿、学園祭の屋台の企画などにむしる全力投球していたような気がします。

また夏合宿以降は、具体的な事例を通じて死をめぐるさまざまな問題を考えることになりました。例えば「脳死」をめぐる臨時調査会が国会で答申を行ったり、あるアイドル歌手が衝撃的な「自殺」をしたのも80年代後半でした。死の問題を通じていかに現在の生をとらえるかという、いわば永遠に未解決のテーマについて真剣に考えることのできた1年間でした。

「死刑囚の記録」はこのゼミを通じて出会った本です。一人の精神科医が重罪人を診察していく過程で、死刑制度が未決囚の人格に与える影響を淡々と記しています。恐らく皆さんなら1日で読み切れる本ではないでしょうか。この制度の是非は長い時間をかけて私たち国民のすべてが議論していくべきものです。ひとつの未解決の社会問題を考えるヒントとして、本書に触れていただければ幸いです。

最後に、この10人程の不思議なゼミで得た友人関係はなぜかいまだに続いています。同窓会の席では、毎週のようにゼミ後に遊んだ思い出話に花が咲きます。好きなように遊ばせて下さった指導の先生への謝意はつきません。今の若い人は人と深くつき合うことで傷ついてしまう世代といわれます。ですから自分の思い出を押しつける気はありません。ただ学生時代の損得のない友人関係は貴重であったな、と私は思います。楽しい夏休みをお過ごし下さい。

(本学教員)

新着図書

<和書>

総合女性史研究会編「日本女性史論集 6・7・8」 呉文二「金融読本 第22版」 坂上茂樹「伊藤正男 トップエンジニアと仲間たち」 西田令一「ウェストミンスターへの道 英国下院議員の誕生」 三谷太一郎「近代日本の戦争と政治」 瀬戸内寂聴「孤高の人」 チャールズ・A・ライク「システムという名の支配者 われわれの社会が変わらないのはなぜか」 笹川良一「巢鴨日記」 鄭義「朱鎔基 中国を変える男」 マイケル・キャネル「ルーブルにピラミッドを作った男 I・M・ペイの栄光と蹉跎」 江藤淳「南洲残景」 五百旗頭真「占領期首相たちの新日本」 クリストファー・ヒバート「図説 イギリス物語」 藤田久一「国連法」 南亮進他編「デモクラシーの崩壊と再生 学際的接近」 バリー・ギフォード他「ケルアック」 ティム・ジャクソン「インサイド インテル 上・下」 H・G・ベア「商業帝国イスラムの謎 世界最古の『多国籍コンツェルン』神話」 青島祐子「ジェンダー・バランスへの挑戦 女性が資格を生かすには」 吉川元忠「YEN は日本人を幸せにするか」 T・トドロフ「フランスの悲劇 1944年夏の市民戦争」 杉森久英「戦後文壇覚え書」 C・ドレイン他「インドネシア人」 青山和司「アメリカの信託と商業銀行」 小林尅次「現代東アジア論の視座」 G・C・コーン「世界戦争事典」 西田美昭他編「西田光一戦後日記一九五〇～一九七五年 新潟県一農民の軌跡」 坂崎二郎「エゴン・シーレ」 E・W・サイード「知識人とは何か」 渡辺亮「英国の復活・日本の挫折 英国のビッグバンから何を学ぶか」 佐伯有清「最澄と空海 交友の軌跡」 N・マルカム「ウィトゲンシュタインと宗教」 斎藤精一郎「10年デフレ 日はまた昇る」